

2009 第二回
日台原住民族研究フォーラム
馬淵東一の學問與台灣原住民族研究
馬淵東一の学問と台湾原住民族研究



台日原住民族研究論壇
2nd Taiwan-Japan Forum on Aboriginal Studies
제2회 대만, 일본원주민족연구간담회

文 | 伊萬納威 (政治大學民族學系博士生) 圖 | 編輯部
日本語翻譯 | 石村明子

政治大學原住民族研究中心繼去年「第一屆台日原住民族研究論壇」，今年（2009）8月26~27日再度舉辦「第二屆台日原住民族研究論壇」，並於台灣史前文化博物館隆重展開。今年適逢日治時期民族學者馬淵東一百歲冥誕，論壇特將會義主題訂為「馬淵東一の學問與台灣原住民族研究」，以資紀念。

不辭千里 親友門生齊聚一堂

此次受邀成員，除了台日兩國原住民族研究學者之外，原民中心特邀馬淵東一哲嗣馬淵

國立政治大學原住民族研究センター（以下原民センター）では昨年の「第1回日台原住民族研究フォーラム」に続き、今年（2009年）の8月26、27日も、国立史前博物館で「第2回日台原住民族研究フォーラム」を盛大に行った。今年ちょうど馬淵東一の生誕100周年記念にあたり、フォーラムのテーマもそれを記念して「馬淵東一の学問と台湾原住民族研究」とした。

千里の道を厭わず 親戚、友人、門下生が一齊に集う

今回の会議に招かれた参加者は、日台両国の原住民族研究者のほか、原民センターでは馬淵東一のご子息である馬淵悟教授（日本・東海大学国際交流部）も招待し、基調講演をお願いした。また、馬淵東一の門下生や親戚、友人数名（80代の高齢）も千里の道を厭わず参加し、厳肅な雰囲気学の學術フォーラムに感動と暖かさを添えた。

フォーラムの日程は2日間で、3つの講演、5





論壇觀眾席一隅。
論壇的會場。

悟教授（日本東海大學國際文化部）共襄盛舉，並為論壇進行一場專題演講；以及千里迢迢飛台追憶馬淵東一教授的弟子（年屆80高齡）與親友等數人，讓本次論壇在嚴謹的學術氛圍中，仍不乏感人與溫馨的場景。

為期兩天的論壇議程包含3場專題演講、5場論文發表、1場主題座談。論文發表總計14篇，除了場次三的主題訂為「台灣原住民族研究動向」，其餘場次主題皆為「馬淵東一的學問與原住民族研究」。座談主題則是「追憶馬淵」。

馬淵東一手稿贈政大 轟動全場

3場專題演講安排得極為慎重，依序邀請到松園萬龜雄（東京都立大學名譽教授・國立民族學博物館名譽教授）演講〈馬淵東一與社會人類學的發展〉、楊南郡（台灣南島文史工作室負責人）演講〈在實地調查與譯註《台灣高砂族系統所屬之研究》遇見馬淵東一先生〉，以及馬淵悟教授演講〈有關馬淵東一未發表的原稿—「布農族與鄒族的親屬名稱（二）」〉。其中，馬淵悟演講當下，致贈馬淵東一未發表原稿予政大原民中心主任林修澈教授，此舉出乎全場所料，即刻為論壇掀起高潮，與會成員更是無一不為之動容。

セッションの論文発表のほか、座談会が行われた。発表された論文は14本にのぼり、「台湾原住民族研究動向」をテーマとする第3セッション以外は、「馬淵東一の学問と原住民族研究」を主題にしたセッションであった。また、座談会のテーマは「追憶——馬淵東一先生」であった。

馬淵東一の手稿が政治大学に送られ、会場が盛り上がる

3つの講演は、松園万亀雄（東京都立大学・国立民族学博物館名誉教授）の「馬淵東一と社会人類学の展開」、楊南郡（台湾南島文化工作室責任者）「『台湾高砂族系統所屬の研究』の訳註と実地検証による馬淵東一先生との出会い」、馬淵悟（東海大学国際文化学部教授）「馬淵東一 未発表原稿『ブヌン・ツオウ両族の親族名称（二）』について」という順で、思慮深く計画されたものである。また、馬淵氏は講演直後、馬淵東一の未発表原稿を政治大学原民センター主任・林修澈にその場で贈呈したが、予定外のこの出来事によってフォーラムは最も感動的な一刻となり、最高潮の盛り上がりを見せた。

大御所の研究者による良好な雰囲気作り

5つのセッションの座長、発表者、コメンテーターはそれ相応のレベルの研究者が担当し、厳粛な雰囲気の中でもユーモアを忘れない姿勢で臨んでいたことが印象深く、もちろん発表者も慎重深く発表に臨んでいた。第1セッションは、座長、コメンテーター、発表者とも大御所の強力なメンバーより進められた。座長は劉益昌で、発表者の笠原政治、野林厚志とともに夏休み・冬休みを利用し台湾原住民族居住区域で



元老級學者 為論壇立典範

5場論文發表不論是主持人或評論人，都相當稱職，嚴謹中不忘幽默的風格，皆令人印象深刻。當然，發表人更是戰戰兢兢。第一場陣容堅強，主持人、評論人與發表人都是「元老級」的學者；主持人劉益昌、發表人笠原政治與野林厚志，皆為長年利用寒暑假到台灣原住民族地區做田野調查研究的學者，分別由中研院台史所副所長詹素娟，以及長期致力於博物館工作的林志興等評論，奠定了論壇最好的風範。

第二場由考試委員浦忠成擔任主持人，有2篇環繞在民族傳統信仰之研究，一篇為蔡中涵等發表的〈阿美族原初社會的宗教信仰〉，其次為呂青華的〈馬淵東一の「Onari（姐妹）神」信仰連線〉，由本民族人士或專家如星歐拉姆、久部良和子依序進行精彩的評論。第三篇則為石丸雅邦針對馬淵東一在台北帝大時期（1928-1935）往來的高砂族研究者與理蕃警察所做研究，由師大張素玢擔任評論人；此篇可說是兩天議程中評論較為銳利的一場，無論對發表者或與會者，皆造成一些震撼。

台灣原住民族研究新方向



「台灣原住民族研究動向」：陳秀珠（代讀）、陳凱劭、黃葳威、許功明、孫大川、楊政賢、夏黎明。

「台灣原住民族研究動向」：陳秀珠（代理）、陳凱劭、黃葳威、許功明、孫大川、楊政賢、夏黎明。

フィールドワークを進めている研究者である。そして、コメントはそれぞれ中央研究院台湾史研究所副所長の詹素娟、及び長期にわたり博物館に勤務してきた林志興によって行われ、フォーラムでの良好な雰囲気築き上げた。

第2セッションはの浦忠成が座長で、蔡中涵等の「アミ族における原始社会の宗教信仰」、及び呂青華の「馬淵東一の「Onari 神」信仰研究のつながり」という民族の伝統的信仰の研究に関する2本の論文が発表された。また、本民族出身のシン・オラムおよび専門家の久部良和子によって内容の濃いコメントが行われた。3本目の論文は台北帝大時代に馬淵東一と交流があった高砂族研究者と理蕃警察についての石丸雅邦による研究論文「馬淵東一の台北帝国大学時代（1928-1935）に交流があった高砂族研究者と理蕃警察」で、師範大学の張素玢がコメントを行った。このコメントは2日間のフォーラムの中でももっとも鋭いものであり、発表者、出席者に関わらず、ともに震撼させられるほどであった。

台湾原住民族研究の新たな方向

第3セッションは許功明が座長で、最新の原住民族研究の動向について話し合う場を提供した。関華山の日本統治時代の建築文化に関する文献資料、黄葳威の原住民テレビ局の位置づけに関する分析、楊政賢の「島嶼」民族誌の確立についての研究など多岐にわたるもので、順に陳凱劭、孫大川、夏黎明によってコメントが行われた。このセッションでは研究の新たな方向を引き出すことができ、フォーラムに異なる視点を添えるものだった。



第三場由許功明主持，旨在提供一個平台給目前新的原住民族研究動向，故研究主題多元，包括關華山的日治建築文化的文獻資料、黃葳威的原民台定位分析，以及楊政賢「島嶼」民族誌的建構等議題，由陳凱劭、孫大川、夏黎明依序評論。本場次引出研究新方向，為論壇增添不同的視角。

青年學者 追隨馬淵腳步

第四場是馬淵東一師徒一脈相連的場次，由身為馬淵學生的笠原政治擔任主持人，長期研究布農族的日本青年學者石垣直探討〈馬淵東一在布農族研究史的定位〉，由布農族海樹兒友刺拉菲評論；李宜憲則透過《台灣高砂族系統所屬之研究》探討魯凱族的民族認定，由范織欽校長、張中復教授評論；鍾興華的〈馬淵東一及其Paiwan族系譜〉，由族人耆老華阿財評論。

第五場由清水純擔任主持人。帶領的發表群主要基礎都建立於《台灣高砂族系統所屬之研究》一書，由吳明義評論原英子的〈馬淵東一的Pangtsah族研究〉；官大偉評論伊萬納威的〈泰雅族Cəoleq支系二種起源說考異〉；王梅霞評論鄭光博的〈泰雅族的社與語言的變遷〉。

池上掃墓 追悼馬淵東一

待兩天的論壇議程告一段落，台日後學們為感念並追悼馬淵東一教授對台灣原住民族研究之貢獻，於第三天一早前往馬淵教授位於台東池上摯友高明生家族墓園進行祭拜致意。經過本屆論壇相互切磋與對話，更進一步讓台日雙方原住民族研究累積更豐碩的學術成果。◆



若手の学者 馬淵の足跡を追う

第4セッションは馬淵東一のもので、やはり門下生の笠原政治が座長を務め、長年ブヌン族を研究している日本の若手の研究者・石垣直による「ブヌン研究史における馬淵東一の位置」の発表とハイスル・パララヴィによるコメント、李宜憲による『台湾高砂族系統所屬の研究』より見たルカイ族の民族認定に関する発表と、范織欽、張中復によるコメント、鍾興華の「馬淵東一とそのパイワン族系譜」の発表とパイワン族長老の華阿財によるコメントがなされた。

第5セッションは清水純が座長を務めた。発表内容は主に『台湾高砂族系統所屬の研究』にもとづいており、原英子による「馬淵東一のパングツアハ族研究」の発表と吳明義によるコメント、イワン・ナウイによる「タイヤル族Cəoleq支族（系統）内の2つの起源伝説考」の発表と官大偉によるコメント、鄭光博による「アタヤル族の社と言語の変遷」の発表と王梅霞によるコメントが行われた。

池上での墓参り 馬淵東一を偲ぶ

2日間のフォーラム終了後、後学の徒である日台双方のフォーラム参加者たちは馬淵東一を懐かしみ追悼するため、3日目の朝、台東の池上に住む親友である高明生氏の家族墓園に向かい墓参りを行った。今回のフォーラムでは、切磋琢磨と対話を通じ、日台双方が原住民族研究の成果を積み重ねてより豊かにし、学術的に大きな成果を得ることができた。◆

